

# 『元音統韻』における増補字について

浦 山 あゆみ

## はじめに

陳蕙謨<sup>(1)</sup>の『元音統韻』二十八巻は、その一部分が『五車韻府』という書名で梓行され、プロテスタント宣教師ロバート・モリソンが『華英辞典』を編む際に参照した書として、華英字書編纂史の研究においてしばしば取り上げられる<sup>(2)</sup>。

陳氏の『五車韻府』(以下モリソンの『五車韻府』と区別するために『陳氏五車』という)は、『元音統韻』巻九から巻十八の「統韻」全十巻にわたる部分を抽出し刊行したものであり、現在のところ二種のテキスト——すなわち慎思堂本と玉衡堂本——が確認できる。慎思堂本『陳氏五車』は、慎思堂本『元音統韻』の同じ版本を用い、部分的に刪改したテキストであり、さらに慎思堂本『陳氏五車』には康熙四十七年本と康熙五十三年本の二種があると考えられる。玉衡堂本『陳氏五車』の方は乾隆二十七年刊で、文字の状況や版本の摩耗度合いから推察するに、慎思堂の版本を更に再利用したものと思われる<sup>(4)</sup>。要するに、『元音統韻』は全二十八巻であるが、最後尾に附された巻二十三から巻二十八までは呉任臣輯『字彙補』<sup>(5)</sup>であり、実質的には二十二巻、そのうち十巻分が『陳氏五車』として版を重ねたことになる<sup>(6)</sup>。『陳氏五車』

(1) 生年は万暦23年(1595)～28年(1600)頃、卒年は康熙24年(1685)～31年(1692)頃と推定される。『元音統韻』は陳蕙謨没後に刊行され、序文などの記載により編著者は一人ではないと考えられるが、『字彙補』部分以外の全巻に陳蕙謨の名を掲げることから、編著者の代表としてみなす。

(2) 『陳氏五車』とモリソン『五車韻府』の関係については、朱鳳2009が最も詳しい。

(3) 藩序二葉表二行目ならびに五葉表二行目の「統」字を削り「車」字へ変えており、これ以外にも複数箇所を刪改した痕跡が確認できる。

(4) 中国人民大学図書館蔵玉衡堂本を調査した。

(5) 本稿では『四庫全書存目叢書』經部小学類に収められるテキストを底本とした。

(6) 筆者が実際に目睹したのは首都師範大学図書館蔵本と故宮博物院図書館蔵本の二種で、

部分が何度か重版された理由は、『陳氏五車』が明代に流行した字書『字彙』を底本として所収字を音韻順に並べた韻書であったからと考えられる。筆者の調査によれば、『陳氏五車』と『字彙』とはいわゆる「篇韻」の関係にあり、『字彙』の韻引き字書として『陳氏五車』は編まれた可能性が高い。ただし、『字彙』と『陳氏五車』とが単純な「篇韻」の関係であるとは言い難い側面もある。なぜなら『字彙』所収字と『陳氏五車』(すなわち『元音統韻』「統韻」部分)所収字を比較調査した結果、異同が認められるからである。本稿ではそれらの異同について指摘しておきたい。

### 第一節 『元音統韻』「類音」と「統韻」の関係

『陳氏五車』が『元音統韻』の巻九から巻十八にわたる「統韻」部分であることは既に述べたが、『元音統韻』にはもう一つ「類音」と題される部分があり、『元音統韻』巻三から八に至る五巻分を占め、「統韻」(すなわち『陳氏五車』)と対応関係にある。具体的にどのような関係にあるかを把握するために、「類音」凡例の文章を見ておくこととする。<sup>(7)</sup>

目經る所の字は、先ず其の音を求め、次に其の韻と義とを求む。目未だ經ざる字は、先ず其の形を攷え、次に其の音を求め、又た次に其の韻と義とを求む。類音とは目未だ經ざる字のために言う也。偏傍を以て形を列ね、分註を以て韻と音とを列ぬ。韻に明らかな者は、即ち七音<sup>(8)</sup>の何れに屬するかを知りて、而して音を得る矣。唱和に明らかな者は、分註の下の二字は母を定め、上の字は韻を定め、之れを翻切し、即ち音を得

---

共に康熙四十七年慎思堂本である。他に未見であるが、康熙四十七年本はプリンストン大学東アジア図書館に、康熙五十三年本は中央研究院傅斯年圖書館・香港大学馮平山圖書館に所蔵される。

(7) 『元音統韻』巻之三「類音凡例」。原文は「目所經字、先求其音、次求其韻與義、目未經字、先攷其形、次求其音、又次求其韻與義、類音者爲目未經字言也。以偏傍列形、以分註列韻與音。明於韻者、即知七音之何屬、而得音矣。明於唱和者、分註下二字定母、上字定韻、翻切之、即得音。未明韻與唱和者、註某聲某韻某音之第幾、閱統韻而得音。然則何不從古今韻會例、列字母、列韻首、以便後學乎。曰人知字母者少、列七音所屬次數人盡易得也。如一字首切是平凡角一、即知平者平聲也、凡者三凡韻也、角音者角音之第一、即見母也。翻統韻、平聲三凡韻中角之第一、即得其韻與音并註釋也。餘倣此。」(句読点は筆者による)

(8) 陳氏の七音とは宮・商・角・徵・羽・變徵・變宮をいう。

る。未だ韻と唱和とに明らかならざる者は、註の某聲・某韻・某音の第幾つかは、統韻を閲て、而して音を得る。然れば則ち何ぞ古今韻會の例に従わず、字母を列ね、韻首を列ね、以て後學に便すか？。曰く、人の字母を知る者少なし。音の屬する所の次數を列ぬれば、人盡く得易き也。如し一字の首切は是れ平声角一なれば、即ち平とは平聲也。凡とは三の凡の韻也。角音とは角音の第一、即ち見母なるを知る也。統韻を翻せば、平聲三凡韻中の角の第一なれば、即ち其韻と音並びに註釋とを得る也。餘は此に倣う、と。

上記の凡例によれば、「類音」は目的の文字の情報を得るために設けられた部分であり、さらに音韻・唱和のいずれにも詳らかでない者は、「類音」を参考にして「統韻」部分を引くように配慮して作られたことが分かる<sup>(11)</sup>。まず、その探したい文字の詳細（すなわち音義）を得るためには、「類音」所収字の各分注に示された情報を頼りに「統韻」を繙くのであり、「類音」が「統韻」の索引にあたる部分であることは明らかである。このような意味あいにおいて「類音」と「統韻」は対応関係にあり、具体的には「類音」が「統韻」所収字の部首別筆画順索引となっているといえる。

## 第二節 『字彙』と『元音統韻』「類音」所収字

前節で「類音」はいわば「統韻」の索引といえる関係にあることを確認したが、甯忌浮氏は、「類音」部分の注釈は『字彙』<sup>(12)</sup>所収の33179字の注釈を全部削除して音を示す陳氏独自の漢字による符号を付けたのみであり、「類音」に対応する「統韻」部分は、『字彙』所収字を注釈も含めて全て142韻へと並べ換えただけである、とする。そして、「統韻」所収字の注釈は『字彙』の注釈そのまま踏襲するものであり、「統韻」の収録字数が『字彙』より増え

(9) 「音」はおそらく「一」の通り。

(10) 反切を繰り返し唱えて音を取り出す方法。

(11) こうした初学の者に対する教示は、明清時代の小学書にみられる童蒙教育思想によるものであろう。

(12) 甯忌浮2009による。

(13) 甯氏が用いた『字彙』のテキストは不明。本稿では上海辞書出版社が1991年に康熙二十七年靈隱寺刻本を影印刊行したテキストを用いる。

ているのは、『字彙』で複数の音がある文字を分けて、別々に収録したからにすぎないと甯氏は述べる。

確かに巨視的に観察すれば、「類音」は『字彙』所収字に、独自方式で各漢字の音韻分類を示したのみに見えるかもしれない。しかも、「類音」に収められた漢字は、基本的には『字彙』所収字と排列順序まで酷似しているため、一見すると『字彙』を踏襲しただけのように捉えられる。ただ、筆者の調査によれば、若干の異同も認められる。『字彙』「類音」「統韻」所収字を併せば6万字以上の親字があるため、見落としの可能性は否めないものの、「類音」所収字と『字彙』所収字を比較してみたところ、甯氏の見解とはやや異なり、『字彙』所収字のほうが多いことが分かった。以下、『字彙』『字彙補<sup>(14)</sup>』と『元音統韻』の「類音」「統韻」の所収字を比較した結果を、I～Vに分類して示す。

- I. 『字彙』にあるが、「類音」「統韻」には無い文字：114例  
子集11・丑集7・寅集7・卯集5・辰集9・巳集7・午集14・未集8・申集7・酉集9・戌集11・亥集19
- II. 『字彙』に無いが、『字彙補』「類音」「統韻」にはある文字：7例  
寅集1（寔）・巳集1（燻）・午集2（瑤・鞠）・未集3（罌・蓄・甜）
- III. 『字彙』『字彙補』には無いが、「類音」「統韻」にはある文字：4例  
丑集1（埔）・午集2（馱・覈）・酉集1（醴）
- IV. 『字彙』「類音」に無く、『字彙補』「統韻」にある文字：1例  
「統韻」卷之十一平声交疑母1（寔）
- V. その他：3例  
未集1（利）・亥集2（鴛・駘）

---

(14) 本稿では『元音統韻』附載の『字彙補』を用いる。

このようにⅠに示した『字彙』の方が、Ⅱ～Ⅴより約100文字多いことが分かる。本稿では上記のうち、Ⅱ～Ⅴに分類される文字を中心に検討していく。

### 第三節 Ⅱの検討

Ⅱで示した七文字は、おそらく陳蓋謨が『字彙補』によって増補したと考えられる例である。「統韻」分注の引用文献を四角く囲って示す手法が『字彙補』分注の形式をそのまま踏襲している点からも予測でき、下に具体的に示すように分注そのものの内容からも推察できる。

実際に「統韻」を繙き、各親字の下に示された具体的な情報（分注に示される音義等）が、『字彙補』のそれと合致していれば、『元音統韻』<sup>(15)</sup>が『字彙補』を参照して文字を増補したと証明できる。そこで、Ⅱ（『字彙』に無いが、『字彙補』<sup>(16)</sup>「類音」「統韻」にはある文字）の七文字の注釈を比較する。

Ⅱ-a. 嶯（「類音」寅集山部十三画）

『字彙補』寅集山部「説文嶯本字。」

「統韻」卷之十三上声癸韻從母「案嶯，山險峻貌，本作嶯補。」

Ⅱ-b. 爇（「類音」巳集火部二十画）

『字彙補』巳集炎部「許其切，音希，爇火也。」

「統韻」卷之九平声乚韻曉母「爇火也補。」

Ⅱ-c. 瑤（「類音」午集玉部七画）

『字彙補』午集拾遺玉部補字「盧宜切，音希，人名，晉天福十二年遼太宗以劉晞爲西京留守，通鑑考異云實錄作禧，或云名瑤。」

「統韻」卷之九平声乚韻曉母「人名，晉劉晞，或作瑤。」

(15) 句読点は筆者による。

(16) 同上。

II -d. 耬（「類音」午集禾部十一画）

『字彙補』午集禾部「古遮切，音加，耕也。」

「統韻」卷之十一平声家韻見母「耕也補。」

II -e. 罡（「類音」未集网部五画）

『字彙補』未集网部「與剛同，戰國策吳註引水經鴈門子延水東逕罡城南澤燕水，又符籙家多用此字，白玉蟾琅書序作為符圖印訣罡呪之文。」

「統韻」卷之十一平声附岡韻見母「天罡星名，明王鴻儒曰，參同契云，二月榆魁臨于卯，八月麥生天罡，據西因知天罡，即北斗也。又唐史德宗即位，有司奏宣政殿內廊壞，請修繕，大卜言，孟冬為魁罡，不利穿築，請卜他月，上曰，春秋之義，啓塞從時，何魁罡之有，命修之。按正字通補。」

【參照】『正字通』未集网部「居康切，音剛。天罡星名，明王鴻儒曰，參同契云，二月榆魁臨于卯，八月麥生天罡，據西因知天罡，即北斗也。又唐史德宗即位，有司奏宣政殿內廊壞，請修繕，大卜言，孟冬為魁罡，不利穿築，請卜他月，上曰，春秋之義，啓塞從時，何魁罡之有，命修之○舊本闕。」

II -f. 耆（「類音」未集老部五画）

『字彙補』未集老部「同耆」

「統韻」卷之十四上声檢端母「同耆補。」

II -g. 甜（「類音」未集舌部五画）

『字彙補』午集甘部「與恬同，甘也。又水名，洞冥記甜水，去虞淵八十里。」

「統韻」卷之十二平声兼定母「定兼切，美也，舌知甘者，甘也，或作恬○按字彙原無此字，今从唐韻補之。」

【參照】『字彙』恬（午集甘部六画）「徒兼切。簾平聲。說文美也廣韻甘也○从舌从甘，舌知甘者。」

『正字通』恬（午集甘部六画）「亭年切。音田。說文美也。廣韻甘也。蘇軾發廣州詩，三杯輒飽後，一枕黑甜餘，註輒飽謂飲酒，

黒甜謂臥睡也○从舌从甘，舌知甘者。…（中略）…俗作甜，同文。舉要泥集韻誤以恬同恬。舊本舌部恬重出，宜刪。」

『正字通』恬（未集舌部四画）「同甜。舊本恬見甘部六畫，重出，音含亦非。正韻恬亦作恬，恬恬爲一，尤非。」

「統韻」恬（卷之十二平声兼定母）「說文美也。廣韻甘也○从舌从甘，舌知甘者。」

上の例七文字のうち、「統韻」が『字彙補』の注釈をそのままに受け継いだと考えられる例は b・d・f の三例、『字彙補』の注釈を簡略化したと考えられるものが c である。したがって、大まかにはやはり『字彙補』によって補ったとってよかろう。『字彙補』に基づいて補った文字には補<sup>17</sup>という印が注釈の末尾に付され（a・b・d・f）、無い場合（c・e・g）は、『字彙補』本編以外に拠ったと考えられる（cのみ『字彙補』だが「拾遺」部分の所収字である）。

注釈が合致しない三例（a・e・g）については、いずれも「統韻」の注釈の方が増えている例であり、うち二例（e・g）は依拠した書を明示している。

e の依拠した書『正字通』<sup>17</sup>に疑義はなく、「統韻」が補うために参照した字書類として、『正字通』も含まれることが明示されている。

g の注釈にある「唐韻」が何を指しているのか不明であるが、「統韻」の注釈の体例として、『字彙』以外は基本的に書名を線で囲うパターンが多いため、「唐韻」は具体的な書名では無い可能性がある。しかもよく見ると、この「唐韻」の二文字のみやや小さく、後から手を加えたような痕跡が認められるため、後人の刪改である可能性も否めない。「甜」は「類音」では舌部に見え、異体字の「恬」は甘部に見える。『字彙補』では甘部に「恬」を収めるのみで、舌部に「甜」は見えない。『字彙』では「恬」が甘部に見えるのみだが、『正字通』では甘部に「恬」、さらに舌部にも「恬」を収め、その下注に「同甜。舊本恬見甘部六畫重出，音含亦非。…（下略）」とし、『字彙』における重複を指摘している。ただ、筆者が底本とした『字彙』に重複

<sup>17</sup> 康熙九年序弘文書院刊影印本（中国工人出版社1996年）を用いた。

は見られないため、あるいは『字彙』のテキストによる相違であろうか。結局、「類音」では舌部に「甜」・甘部に「恬」をそれぞれ分けて配置するものの、「統韻」では両字とも卷之十二平声兼定母に収めて「恬」字の注釈の方は『字彙』所収「恬」の注釈（すなわち「説文美也。廣韻甘也○从舌从甘，知甘者」）をそのまま踏襲し、さらに「統韻」の「甜」に出典（『説文』と『廣韻』）を示さず「恬」の注釈の順序を入れ替えて転載した形となっている。つまり、「統韻」の「甜」の義注は、『字彙補』を参考しつつ『字彙』所収の別の字体「恬」の注釈をも折衷して採用したものとしよう。

最後になったが、aのように典拠を明示せずに増補している例は、Ⅲに分類した例（次節参照）にも見られる。<sup>118)</sup> aの文字「臺」は『字彙』『正字通』とも収められないため（別字体の「嶂」は収められる）、おそらく『字彙補』を基に、「案」語を附し補ったのであろう。<sup>119)</sup>

以上をまとめると、Ⅱの文字群に分類した『元音統韻』における増補字は、基本的には『字彙補』に依拠して補われた漢字と考えられる。ただ、今回の調査では、上記cの例からも看取されるように、「統韻」では『字彙補』から補った漢字には補印をつけて示し、それ以外（『字彙補』拾遺部分も含む）から補った漢字には必ずしも補印をつけずに増加させているものがあることが分かった。そして「統韻」分注からは『字彙』や『字彙補』以外の他の書——具体的には『正字通』——をも参照し、補印ではなく、分注に出典を示して区別しているといえる（e・g）。

#### 第四節 Ⅲ・Ⅳの文字について

本節ではⅢ（『字彙』『字彙補』に無く、「類音」「統韻」に見られる文字）とⅣ（『字彙』に無く「類音」にも無いが、『字彙補』『統韻』には見られる文字）に分類した計五文字を中心に見ていく。Ⅲの文字については、『字彙』『字彙補』に無いため、前節で見たように「統韻」が『字彙』『字彙補』以外に依拠したと考えられる『正字通』の注を参考として掲げる。さらに『正字通』未収の漢字もあるので、多くの異体字等を収録する大型字書『漢語大字典』<sup>120)</sup>を併記

118) あるいは『字彙』版本の相違により、別の版本には収録されている可能性もある。

119) 厳密にはaの「案」語とe・gの「按」語は分けて考える必要があると思われるが、本稿では触れない。

することとする。また、『字彙』等と同義の異体字が見える場合は【参照】として挙げておく。

Ⅲ-a. 埔（「類音」丑集土部七画）

「統韻」卷之十三上声古韻滂母「縣名，即今潮州大埔縣，是也○按字彙本無此字，故類音補錄。」

『正字通』未収

『漢語大字典』p475 「(一) pǔ〔黃埔〕地名。在广东省珠江口。(二) bù〔大埔〕縣名。在广东省东北部。」

Ⅲ-b. 𩇛（「類音」午集白部十画）

「統韻」卷之十四上声廣韻匣母「氣容貌，舊木(21)闕，譌作𩇛補。」

『正字通』午集白部十画「詡徃切，音晃。人名燕主慕容𩇛，舊本闕，譌作𩇛，附十四画非。」

『漢語大字典』p2837 「huàng《廣韻》胡廣切，上蕩匣。人名用字。《廣韻·蕩韻》：“𩇛，人名。”《晉書·慕容𩇛載記》：“慕容𩇛字元真，胤第三子也。”」

【参照】『字彙』𩇛（午集白部十四画）「戸廣切，黃上聲，氣容貌。又人名，晉有慕容𩇛。」

Ⅲ-c. 𩇛（「類音」午集目部十画）

「統韻」卷之十二平声岡韻附肩韻羣母「說文目驚視」

『正字通』午集目部十画「渠榮切，音榮。說文驚視也。又素問少陽終者百節皆縱，目𩇛絕系，註𩇛者直眦加驚貌。又無所依也。詩唐風獨行𩇛𩇛，與趨通。又憂也。周頌𩇛𩇛在疚，今詩作𩇛字譌，義同。匡衡作𩇛𩇛在疚，非，𩇛，與惇通。總要𩇛音暄，楷作暖，合暖𩇛一尤非○从目袁聲，篆作𩇛<sup>(22)</sup>。說文本作𩇛，俗作𩇛𩇛孳孳。」

(20) 『漢語大字典第二版（九卷本）』2010年4月第1版を用いる。

(21) 故宮博物院圖書館本『陳氏五車』では「本」となっている。

(22) 文字不鮮明の場合は■で表記する（下同）。

『漢語大字典』p3119「《説文》：“𦉰，目驚視也。从目，袁聲。《詩》曰：‘獨行𦉰𦉰。’”郭沫若《金文叢考·釋共》：“余謂𦉰即玉環之初文，象衣之當胸處有環也。从目，示人首所在之處。”

(一) qiòng 《集韻》葵營切，平清羣。元部。

①目惊視。《説文·目部》：“𦉰，目驚視也。”《素問·診要經終論》：“少陽終者，耳聾，百節皆縱，目𦉰絕系。”王冰注：“𦉰，謂直視如驚貌。”

②忧愁。《正字通·目部》：“𦉰，憂也。《周頌》：‘𦉰𦉰在疚。’今《詩》作孃字。”③孤独无依貌。《説文·目部》：“𦉰，《詩》曰：‘獨行𦉰𦉰。’”按：今本《詩·唐風·杕杜》作“𦉰”，毛傳：“𦉰𦉰，無所依也。”《正字通·目部》：“𦉰，無所依也。”

(二) huān 《集韻》旬宣切，平仙邪。

同“還”。复返。《集韻·僊韻》：“𦉰，復返也。亦作𦉰(𦉰)。”

### Ⅲ-d. 醴 (『類音』酉集西部十二画)

『統韻』卷之一平声公韻定母「馬醴，又曰醴<sup>補</sup>。」

『正字通』未收

『漢語大字典』p3837「乳汁。清王士禛《東丹王射鹿圖念東先生席上作》：“秋冬射獵海東嶺，頭鵝燕罷傳釀漿。”」

【参照】『字彙』醴(酉集西部六画)「徒紅切，音同。馬醴也。一曰醴也○又上聲杜孔切。酒壞也。」

『正字通』醴(酉集西部六画)「徒紅切，音同。馬醴也。一曰醴也。又杜孔切。酒壞，杜非也。」

『統韻』醴(卷之一平声公韻定母)「馬醴也。曰醴也。」

いずれも僻字であり、文字を増補したことを示すのは3例のみ(a・b・d)であり、cは明示しない。また、aとdは具体的に「統韻」がどの字書類を参照したのか不明であるうえ、さらに孫引きした可能性もある。

bの「舊木」はおそらく版木の欠けか誤刻であり、正しくは「舊本」、具体的には『字彙』を指すと推察される。『字彙』にbの文字は収められず、「統韻」の中は『正字通』注釈そのままを用いていることが分かる。

次にⅣの1例を見てみる。

IV-a. 𪗇 (「類音」未収)

『字彙補』寅集山部「**集韻**與嶢同。」

『統韻』卷之十一平声交疑母「同上<sup>23</sup>**補**，字彙無此字。」

前節で検討したⅡの例からも分かるように、「統韻」注釈では基本的には『字彙補』により補う場合は**補**印を附す。Ⅳの例もⅡ同様である。ただ、この例は「統韻」に収録したものの、「類音」からは漏れてしまった点のみが異なっていると考えられる。ここから推測できることは、まず「統韻」部分が作られ、さらに「統韻」所収字を基に「類音」部分が編纂されたのではないかということである。

## 第五節 Vについて

VはⅠ～Ⅳのいずれの分類にも当てはまらない漢字である。

V-a. 𪗇 (「類音」未集未部三画)

『統韻』卷之十二平声京透母「未下木也。」

【参照】『字彙』𪗇 (未集未部二画)「他經切，音汀。未下木也」

『正字通』𪗇 (未集未部)<sup>24</sup>「他經切，音汀。未下木，即𪗇也。」

V-b. 𪗇 (「類音」亥集馬部五画)

『統韻』卷之十一平声涓影母「汚面馬。」

【参照】『字彙』𪗇 (亥集馬部五画)「𪗇員切，音冤。汚面馬。」

「類音」「統韻」とも「𪗇」未収。

V-c. 𪗇 (「類音」亥集鳥部八画)

『統韻』卷之十二平声械溪母「鳥啄食曰𪗇。」

『統韻』卷之十二平声械照母「義同溪兼切。」

【参照】『字彙』𪗇 (亥集鳥部八画)「丘銜切，音謙。鳥啄食曰𪗇○又竹咸

23 上の字は「嶢」。

24 画数不記載だが、おそらく二画。

切，斬平聲。義同。」

『正字通』 鵠（亥集鳥部八画）「■堅切，音謙。鳥啄食。六書故長喙啄也。方音讀斬平聲，義同。」

「類音」「統韻」とも「鵠」未収。

これらの三例は、『字彙』『字彙補』『正字通』『漢語大字典』のいずれにも収められない文字であり、誤字と考えられるものである。どの例も漢字の一部がやや異なっており、正字と想定される漢字とその注釈を【参照】に記した。ただ、「類音」「統韻」とも同じ字体で収められているので、即座に誤字とするのは躊躇されるため、V（その他）として分類した。管見の限りでは他の字書類に収められず、あるいは『元音統韻』独自の文字であろうか。

## 第六節 結語

以上をまとめる。

「統韻」（すなわち『陳氏五車』）と「類音」は対応関係にあり、「類音」は「統韻」の部首別筆画順索引である。そして『字彙』と、それを基本に編まれた「統韻」とは、いわゆる「篇韻」の関係にある。さらにごく大雑把に捉えれば、『字彙』所収字を「類音」は並べ換えて編纂した索引といえる。しかし、本稿での調査により、「統韻」「類音」はさらに『字彙補』により若干数の漢字を増補しており、それら増補字は『字彙補』だけではなく『正字通』等をも用いていたことが分かった。つまり『字彙』と「統韻」は単純な「篇韻」関係とは言い難い側面を持っており、「統韻」が単なる『字彙』の音韻順索引にとどまるのではなく、『字彙補』『正字通』によって『字彙』を補足しようと試みていた痕跡が、本稿において確認できたと思う。

### <参考文献>

飛田良文・宮田和子「ロバート・モリソンの華英・英華字典 A DICTIONARY OF THE CHINESE LANGUAGE について」近代語研究会編『日本近代語研究 1』ひつじ書房1991年10月

耿振生『明清等韵学通论』语文出版社 1992年9月

飛田良文・宮田和子「ロバート・モリソンの華英・英華字典 A DICTIONARY OF THE CHINESE LANGUAGE 第二部「五車韻府」の諸版について」近代語

- 研究会編『日本近代語研究2』ひつじ書房 1995年12月
- 馮錦榮「陳蓋謨（1600?-1692?）之生平及西學研究——兼論其著作與馬禮遜（Robert Morrison1782-1834）《華英字典》之中西學緣」香港大學中文系《明清史集刊》第九卷 2007年9月
- 朱鳳著『モリソンの「華英・英華字典」と東西文化交流』白帝社 2009年3月
- 古屋昭弘『張自烈「正字通」字音研究』好文出版 2009年3月
- 富平美波「方中履『切字積疑』「等母配位」の条を読む（「切字積疑」訳注1）」『アジアの歴史と文化』第13輯 2009年3月
- 甯忌浮著『漢語韻書史 明代卷』上海人民出版社 2009年11月
- 朱鳳「ロバート・モリソンの日本への影響について——幕末政府が所蔵したモリソン書とその利用——」関西大学アジア文化交流研究叢刊第4輯『東アジアにおける文化情報の発信と受容』2010年2月
- 宮田和子著『英華辞典の総合的研究——19世紀を中心として——』白帝社 2010年3月
- 沈國威編『近代英華英華辭典解題』関西大学東西学術研究所資料集刊31 2011年3月
- 彭于綸「陳蓋謨音學思想之研究——以《皇極圖韻》和《元音統韻》為主」國立高雄師範大學碩士論文 民國102（2013）年6月
- 王松木「因數明理——論陳蓋謨《皇極圖韻》的理數思想與韻圖設計」國立中山大學中國文學系《文與哲》第二十三期 2013年12月
- 浦山あゆみ「陳蓋謨『元音統韻』をめぐる——『皇極統韻』との比較を中心に——」『文藝論叢』第八十三号 2014年10月
- 万献初「《五车韵府》文献源流与性质考论」《文献》2015年第3期 国家图书馆
- 浦山あゆみ「『元音統韻』未収の部分について——『皇極統韻』「字有三合曲有四合」を中心に——」『文藝論叢』第八十六号 2016年3月